

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 加藤美帆 印

学位申請者 高原太一

論文名 米軍立川基地拡張反対運動の再検討
——「流血の砂川」から多面体の歴史像へ

高原太一氏から博士学位請求論文「米軍立川基地拡張反対運動の再検討—「流血の砂川」から多面体の歴史像へ」が提出されたことをうけ、2022年1月12日開催の総合国際学研究所教授会にて審査委員会が選任され、審査が開始された。

審査委員会は、加藤美帆（教授、教育社会学）が主査を務め、主任指導教員の岩崎稔（教授、主任指導教員、哲学／政治思想）、米谷匡史（教授、日本思想史・アジア論）、上原こずえ（講師、社会学、沖縄研究）、小笠原博毅（神戸大学教授・カルチュラルスタディーズ）という5人の委員から構成されている。なお、同論文は、2021年11月24日の事前審査を経て、その際の助言に従って改訂されたうえで提出されている。

審査委員会は、各委員がそれぞれの見地から論文を精査し、詳細に吟味した上で、2022年2月14日に本学中会議室にて対面形式で最終試験を実施した。その結果、本論文が本学研究科の評価基準に照らして博士学位を授与する水準に達していると判断した。審査委員会は全員一致で、高原太一氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文は、1955年5月に浮上した米軍立川基地の滑走路延長にともなう拡張計画に反対した運動、いわゆる「砂川闘争」の歴史像を再検討する試みである。この闘争は、土地の強制接収に対する地元住民の反対運動を、社会党・共産党・労働運動・学生運動などの組織と知識人が支援し、最終的に計画の撤回を勝ち取った闘争としてよく知られている。ただし、高原氏によれば、同時にこの事件は、1956年10月の負傷者1000人以上を出した「流血の砂川」など、3度にわたる警官隊との「衝突」という鮮烈な事件があったために、そのイメージがナラティブの中心を占めてきた。それに対して本論文は、そのようなステレオタイプを相対化し、いわば「多面体の歴史像」として出来事を浮かび上がらせようと試みたものである。その際に着眼されているのは、これまで光が当てられてこなかった周縁的な位置に留め置かれた人びとの経験であった。具体的には、各章ごとに、地元の砂川中学の生徒文集、地元農家の女性たちの残した証言、地元リーダーの国会委員会での参考

人陳述記録、運動支援に携わった知識人によるルポルタージュ、地元農家と交流を重ねながら作品制作にあたった芸術家によるスケッチや写真作品などが、あらためて史資料としてクローズアップされている。それぞれを細かく検討する作業を通じて、本論文は、これまで等閑視され気味であった抵抗の主体を、その内面世界まで含めて描き出そうとした。それを高原氏は「状況内在的推論」という方法意識に基づくものであると説明している。そして、この論文での自身のリサーチクエスチョンを、第一に「米軍立川基地拡張反対運動」とはいかなる実践から構成されていたのか、第二にその実践はいかなる課題と向き合うことで生まれたのか、第三にその実践はなにを目的とし、なにを守るためにおこなわれたのか、という三つの問いとして定式化している。

本論文の目次構成は以下の通りである。

序章

第1章 正当・正統性：地元農家と「絶対反対」の論理

第2章 介入：「基地問題文化人懇談会」高橋碩一の「砂川問題」

第3章 包摂：「基地の教師」の砂川闘争－文集「スナガワ」・サークル運動・教研集会

第4章 参加：地元中学生／傍らで観る者たちの「砂川闘争」史

第5章 表象：写真家たちの「砂川闘争」－新海覚雄と向井潔の「作品」考察を中心に

終章

各章の要旨を示しておこう。

まず序章では、考察の対象、目的、視座、検討素材、方法、先行研究との関係性がはっきりと提示されている。

第一章では、基地拡張問題の当事者である「地元農家」の「絶対反対」論を構成する論点が検討されている。分析の素材となっているのは、まずは「砂川町基地拡張反対同盟」の「行動隊長」であった青木市五郎が「地元農家」代表として国会委員会に出席したさいの発言記録である。この考察を通じて、反対派農家の姿勢の基底には、戦時下から敗戦後／米軍占領下にかけてかれらに降りかかった3つの被害の記憶があったことが浮き彫りにされており、非常に印象的である。高原氏は同時にそれを、地元農家の「女性」の証言、「土地賃貸借契約書」の文面からも傍証し、反対論の論拠が運動の展開と共に「発展」していたことを跡づけた。

第二章では、知識人グループ「基地問題文化人懇談会」などの姿が、歴史教育家の高橋碩一を軸に検討されている。ここで活用されているのは、高橋が警官隊との「衝突」を最初に取材した雑誌『世界』のルポルタージュや、その後の評論、講演記録などのテキストである。高橋は清水幾太郎らと共に支援活動に奔走していたが、高原氏は、高橋のそうした活動ぶりを示す文章のなかに表れる「たじろぐ」という経験にことさらに注目している。同様の「たじろぎ」は、高橋が「原水爆禁止世界大会」において、インド代表から、砂川への訪問はその運動を尊重するがゆえにむしろ控えたいと告げられたときにも経験されている。高原氏は、この章のなかで、砂川闘争に対する同伴知識人としての高橋の葛藤や、

清水幾太郎、堀田善衛など認識の諸相をこと細かに検討している。

第三章では、一転して、拡張予定地と隣接していた砂川中学校の教師たちの実践を検討する。そこでの主要な分析素材は、砂川中教師が結成した「基地と教育」研究サークルの実践記録であり、また同メンバーによる「教育研究集会」での報告集である。砂川中に作られたサークルに参加した教師たちは、綴方実践を通じて、絶対反対派と条件派の家の子ども同士が対立し反目する場面や、警察官の家の子どもが悩み苦しんでいる事態など、一筋縄では解決できない困難な局面に直面していた。そのうえ、北多摩代表として報告した日教組の「全国教研集会」の場では、その実践や文集「スナガワ」について、組合の指導部からそれらが「実感」の次元に留まり「理論」に達していないと批判されて困惑する経験もしていた。高原氏はこれらの経緯を細かく跡づけ、問題の複雑さとともに、現場の教師と日教組指導部／講師団との間の距離、そして問題の乗り越え難さを明らかにしている。

第四章では、その砂川中学の生徒たちが書いた文集「スナガワ」が直接検討されている。文集には、基地拡張について批判する作文が当然数多く登場していたが、その問題意識は反対運動の展開と共に変容していたということ、そして、そのなかに中学生たちの心的態度や行動、また「願う」や「祈る」といった内的行為が確認できると、高原氏は結論づけている。

第五章は、星紀市が編んだ『写真集 砂川闘争の記録』をもとに、運動の現場を撮った写真家たちの作品について考察している。とりわけ地元農家と交流を深めていた2人の芸術家、新海覚雄と向井潔の作品に着目した。それは、「砂川闘争」を撮影した写真の多くが「衝突」の激しさや警官隊の暴力性を主題にしてきたのに対して、新海や向井が、たとえば座り込みをおこなう「女性」たちの「待機の時間」に浮かび上がる表情にピントを合わせているなど、地元民との交流の内部で創作活動をしていたからである。運動のなかで、起こっていることをどうとらえ、どう伝えるのかという難題と格闘した2人の写真家の足跡から、高原氏は、歴史的な出来事を「記録」という行為のなかに内在する当事者性と観察者性のディレンマにまで射程を広げて考察している。

そして、高原氏は、終章として、あらためて総括と先行研究に対する貢献、展望について要約して述べることで、厚みのある本論文の考察を締めくくっている。

【審査の概要および評価】

上記の論文をめぐる2022年2月14日の公開最終試験では、初めに高原太一氏が、「研究史への貢献を中心に、本研究の成果と課題」と題するプレゼンテーションをおこない、その後、各審査委員と高原太一氏の間で以下のような質疑応答が行われた。

総じて審査委員は、本論文が、①反対運動の思想や、その基盤となった歴史背景に内在したうえで、砂川闘争を複数の角度から描き出していること、②一次資料の発掘や当事者への聞き取りを通じて、これまで周縁化された人々の生きられたリアリティを地道に再構成していることなどを挙げて、異口同音に意欲的な力作であると評価した。たとえば、基

地拡張反対運動を通じて民主主義教育を実践した教師たちの葛藤を描き出した第3章、生活綴り方作文の分析から中学生たちの運動との関わりと変化を検討した第4章は、戦後教育史のなかに砂川中学校の教師、生徒たちの実践を位置づける研究として、とくに評価できると考えた。

しかし、公開最終審査では、同時にいくつかの疑問点も指摘され、高原氏自身のさらなる見解を問い尋ねるやり取りもあった。

論文の構成については、高原氏が提示している概念のうち、相互関係がはっきりしないまま提示されている「課題」「目的」「問い」といった項目や、「現代史が抱えている矛盾のありか」とか「状況内在的推論」とかといった言葉の意味が、いくらか掘り下げが甘いままムード的に用いられているのではないか、という指摘があった。また複数のモノグラフをまず書き上げ、それを一体化して本論文にまとめるという制作手順を経たためか、一部に不整合や重複が残っていた。

また議論の内容に関しては、この時代に影を落としているはずの1950年代後半の日本の左翼運動史が持つ細かな位相が十分に掘り下げられていない箇所があること、全学連の方針や教研集会での葛藤にしてもその背後には「国民的歴史学運動」や「山村工作隊」の傷が深く影響しているはずであることが、複数の委員から瑕疵として指摘された。また、原水禁大会でのインド代表が砂川を訪れないという意志表示の背景には、実は中国・インドが合意した「平和五原則」があったことが見落とされている点や、第4章で取り上げられている生徒の「作文」に間違いなく介在しているはずの教師の意図について、高原氏がいささか無自覚であることなどの懸念も表明された。さらに、論文は徹頭徹尾砂川闘争だけを論じているが、それが砂川闘争に寄り添った考察を生んでいる反面、他の社会運動や他の闘争史を後景化させ、かえって砂川闘争のユニークさや種別性へのマクロな考察の妨げになりかねない、という懸念も表明された。

さらに、これは批判ではないが、沖縄研究の立場からは、流血によって「勝利」が獲得されたという砂川論そのものをめぐるとさらに深い洞察も表明された。つまり、砂川の「勝利」は、法治国家では政府間のどのような約束があっても、必ずしも自由な基地建設ができるとは限らないことを示した反面、沖縄では軍令によって銃剣とブルドーザーによる土地強奪が行われ、いまでも辺野古で理不尽な工事が民意を無視して強行されているとき、砂川を「勝利」と捉えることは、基地の存続と拡大の状態に留め置かれた沖縄における土地闘争を「敗北」と位置づけることになり、それは抵抗運動の主体を理解し共感の土台を作ることの妨げにもなるかもしれない、という指摘である。もっともこれはまさに「流血の砂川」像を越えようとする高原氏の論文の目的が妥当であるということを側面から補強する議論ともなる。

以上のような疑問や指摘に対して、高原氏の応答はそのつどの的確であり、自らの論考で明らかにし得た点とその限界、今後に残された課題について明確に自覚したものであった。また、上記の疑問や指摘は、本論文の達成や貢献を高く評価した上で、それをさらに深め

ていくために提示されたものであり、その研究の意義を損ねるものではないことは、審査委員の共通認識であった。

【審査の結果】

以上の審査をふまえて、審査委員会は全員一致で、高原太一氏の博士学位請求論文「米軍立川基地拡張反対運動の再検討——「流血の砂川」から多面体の歴史像へ」は、社会運動史研究に対してオリジナルな貢献をはたす重要な研究成果であると確認し、高原太一氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。